

## Sky Seminar



## 喫茶店モーニング文化

民俗学というと田舎の風習や言い伝えの研究というのが従来のイメージだった。しかし、最近の民俗学は、都市の民俗・日常生活文化にも積極的に扱うようになっていく。筆者のフィールドノートから都市民俗の一例をとりあげてみよう。

中京圏から京阪神・中・四国を経て北部九州あたりまでの都市部を中心に、朝食を自宅ではなく近所の喫茶店のモーニングメニューでとるという習慣、「モーニング」が存在する。サラリーマンが出勤途中に朝食をモーニングでとるといったのは、全国的に広く見られること

だが、「モーニング」は妻や、場合によっては子どもまでもが朝食を喫茶店でとることをいう。また自営業者なら、夫も近所の常連とモーニングをとるといった習慣だ。こうしたモーニングは、単なる食事の場ではなく、近隣の人びと同士の間で井戸端会議の場ともなっている。

モーニングの起りは、高度経済成長期に各地の喫茶店が「モーニング」にトーストを付けるサービスを開始したことに求められるが、興味深いのは、サラリーマン層への浸透とは別に、家族、近隣の生活習慣としてこれを受容する地

域があったという点だ。

モーニングがさかんなのはどちらかといえば、町工場や長屋、銭湯がひしめきあひ、昔ながらの商店街がまだ活気を失っていないような下町のエリアである。なぜ、モーニングをするのか。当事者たちは、「忙しくて朝食をつくっていない暇がない」「近所とのコミュニケーション」などと説明をすることが多いが、近隣同士の敷居が低く、また、「専業主婦が家の中で毎朝家族のために朝食をつくる」といった「近代家族」の「常識」には必ずしもあてまらない生活の論理が存在する地域でモーニングが展開されてきたという点も興味深い。

ところで、大阪のある町では、モーニングの常連たちの何気ない会話の中から、町づくりのアイデアが生まれ、地域の活性化につながったという事例がある。モーニングには、近隣コミュニケーション形成の場、「下町的な公共空間」としての意義もあるといえよう。

さて、「モーニング文化」当事者にとっては当たり前だが、まったくの初耳という方も多かったろう。現代の日本では文化的な均質化が進行している。しかし一方で、こうした生活文化の多様性もまた根強く存在する。「内なる異文化」の発見とその意味の考察（そしてできれば将来の暮らしのヒントをそこに探る）も民俗学の重要な仕事のひとつである。

## 島村 恭則

関西学院大学  
社会学部教授

しまむら・たかのり  
1967年東京都生まれ。筑波大学大学院博士課程退学。人類学研究科単位取得退学。国立歴史民俗博物館助手。秋田大学准教授を経て現在、関西学院大学社会学部教授。専門は、民俗学。とくに、日本の民俗についてフィールドワークをもとに研究。著書「論文文化」『日本より怖い韓国の怪談』。河出書房新社。『モーニングの都市民俗学』。国立歴史民俗博物館研究報告第103号。集英社。など。



西宮上ヶ原キャンパス  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号  
神学部 文学部 社会学部 法学部 経済学部 商学部 人間福祉学部 教育学部(2009年4月 西宮校地に開設予定)

神戸三田キャンパス(KSC)  
〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地  
総合政策学部 理工学部